

目加田さくを著『物語作家圏の研究』

今井，源衛

<https://doi.org/10.15017/12268>

出版情報：語文研究. 19, pp.56-58, 1965-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

目加田さくを著

『物語作家圏の研究』

——その位相及び教養よりみたる物語の形成——

今 井 源 衛

A5版九六五頁、みごとに大著である。目加田さくを氏の学位論文刊行の噂はかねがね承つて、同学に連るものとして、その日を待っていたが、実物を手にするに及んで、案の如く、宏翰壮大なその装にまず圧倒される思いである。申すまでもなく、学界、ことに西日本国文学界の一慶事である。

本書は全十章、各章は二―五節より成り、各節また数項より成る。そこに一貫する視点は、主として日本古代散文学における中国文学の影響の問題といつてよいかと思う。しかし、氏はそれをややもすると、形式的になりがちな比較文学的方法の枠を破つて、思想や構想にまで立入つて考察を加えられる。以下順にやや詳しく云う。

第一章「仏典説話」では欽明朝の仏典の将来から説き起して、將來仏典の名称、その様式等をのべ、ことに偏をもつ説話形式、あるいは遍歴譚形式、またその措辞表現修飾の方法など、一々事例をあ

げて、それが、わが記紀その他の説話の先蹤の一たることを説き、第二章「漢唐小説と史伝」では漢籍外典の将来、その典籍名、又、中国における唐末小説・史伝の性格、及び古代中国の作家と政治との關係を説き、彼等が常に政治と密接な關係にあり、文学は政治的關心の濃い載道文学であつたと述べ、仏典説話と相俟つて共にわが古代文芸の先蹤となつたことを説く。

第三章「漢文体敘述文芸の展開」では、我國の古代の日記・紀行・伝・紀の類につき、七世紀より十世紀まで各々節に分けて細叙し、その間、たとえば柘枝伝が唐樂の柘枝舞に基く創作であることを述べたり、吉備大臣私教類聚の伏文六条を新しく政事要略中より発見、原本の復元を試みるなど貴重な発言をされ、又記紀を論じて、古事紀所伝出雲神話その他が実は民俗神話でなく、仏典説話に影響された創作説話ではないかと、大胆な推測を加えられる。第四章「漢文芸作家圏の位相と特性」では漢文芸將來者又はその主要な荷い手としての帰化人及び留學生・留學僧の問題を扱い、前者帰化人では、その古代文学における広汎で重要な役割を説く。なかでも百濟系貴族と、中国系貴族との二類型にふれ、義慈王、敬服王を祖とする百濟系貴族は、好色淫蕩で才学を好まず、美人系であつたとし、我國桓武朝以来の淫風は後宮に百濟系の血が多量に流れ込んだ為とし、六歌仙の行状の如きも、それによつて説明される。これに對して、中国系帰化人は儒教的倫理的傾向が強いとし、留學生・留學僧もまた元來求道の禁欲的でもあり、彼等による將來典籍も、したがつて、恋愛ものは少く、且つ、彼等による政治的關心が強かつたが、藤原專權と共に、政權から隔離され、遂に傍觀者の諧謔・滑稽に

縮晦してしまつたという。

第五章「歌人作家圏の位相と特性」では、氏は平安歌人群を「下级官吏で漢文芸の素養があり、専門歌人的所遇を受け、自らも代表的歌人をもつて自認しているもの」を一類、「漢文芸にあまり堪能でない皇族系貴族、権門貴族及び女性」を二類とし、両者の中間的なものを三類と區別する。この中、一類作家は貫之らの如く恋愛歌に乏しく、官位に関心ふかく、子女への愛を歌うのが特徴であり、第二類作家は、これに反して、業平らの如く、恋愛中心で道義的配慮がなく、官位に頓着せず、子女への関心がないと云われる。

第六章「女流物語作家圏の位相と特性」では、女流物語作家の教養としての漢詩文が、主として耳学問の形で入っていることなどや、又儒官の娘である彼女等の「非好色性」「固苦しさ」などを指摘し、又、紫式部、道綱母等の場合には自己の家門や身分に対する矜持が、各の作品を書かした原動力だと主張される。たとえば、道綱母に、時姫に対する卑下の意識がないのは「時姫よりは家が上位であるという意識、兼家と曾祖父同志が兄弟であつたという自負」(527P)の爲であり、紫式部が道長を拒んだことに触れて「女房となりながら女房風情と見做される事を忌み嫌うところに、もとの根ざしは同じでありながら、我が一門は沈み、当今の権力者道長とても他愛ない者であるとその醜態を冷静に描き、その女中宮彰子を自己よりも才学、人物共に幼稚なる女性として把握し、つまり「人を人とも思わぬ紫式部の叡智が、現在無力な自己の境遇に思い到つた時、式部日記の憂愁となる」(552P)といわれる。

第七章「漢文芸作家圏に帰属する物語の系列」は、竹取・宇津保

の作品論である。前者は、その素材を化生の貴子説話・聖衆来迎思想・因果思想・神仙説話等に分けて、内外典その他にその先蹤を探ろうとしたもの。宇津保論は骨格である琴の家伝説話について、琴そのものにまつわる内外の記述や伝承を博捜し、それがともと神仙譚と縁のふかいものである事を論証し、宇津保では、それが中国における「君子左琴」の士君子隠遁の姿勢が移入定着したもので、それ故、政界から遠く放逐される者の恨みが俊蔭に造型されるという。又その主題や内容をなす現実性や批判性は、政權より隔離され貧窮になやむ儒官の欲求不満に基くもので、竹取・宇津保・落窪を通じて見られる反藤原的傾向もまた彼等の政權担当者に対する叛骨を示すものであり、物語が好色を否定し、「儒教的修身齊家治国平天下」という載道主義的人生観に律せられる」(636P)のも同じ理由によるとする。第八章「歌人圏作家歌に帰属する作品の系列」では、歌物語を扱い、まず歌物語の先蹤である記紀万葉所見の題詞・序・左注に和歌の加わつたものが、必ずしも日本固来の發生ではなく、むしろ前述の将来の先行内外典に基くところの多いことを述べ、又それを引く平安朝歌物語も、たとえば、琴操や鶯々伝と伊勢物語との例の如く、唐代伝奇等との関係を重視すべきことを論じ、つぎに、歌物語の本質論に入つて、主として平中物語を例にとりながら、それが作者の自記の系統を引く為に、「心境小説私小説性」を有していることを述べ、さらに同じく歌物語とは云え、平中と伊勢・大和の相違につき、思想・表現・影響関係等に亘つて、詳細に論じられている(この部分は、「平中物語論」の改稿)。第九章「女流物語作家圏に帰属する物語の系列」では、源氏物語の思想を問題とし、作者が

主人公に藤原氏でなく源氏を選んだのは、権門藤原氏への反感のあらわれであり、しかも皇族最高の身分の女性も常に不幸に陥り、あるいは「姫君」の描写が常に平凡であるのは、その上流階級の女性に對する「冷徹な眼」を物語るもので、玉鬘の如き筑紫出のすくよかな女性に力を入れているところに、作者の好みが伺われるという。そしてここでも、結論的に、紫式部の憂愁が「己の才学を宮仕所に於いて十分に發揮できぬ不満」によるものと、前述の趣旨をくりかえしておられる。同じく第二節では「色好の否定」の題下に、紫式部は全篇中、一貫して、すぎすぎしい好色や不倫を斥けるが、それは、彼女が倫理的な漢文芸作家圏に属する人であったからだと主張される。第十章「漢文芸作家圏の系譜と行方」は古代諸記・武家

物・軍記物の流れを追って、氏の構想を概括されたものである。以上、本書のほとんど章題を紹介するのみで予定の紙数を費し果してしまった。私としては、大部の書ではあり、内容もまことに豊富であるから、多くの点で教えを受けると同時に、反面異論のある箇所も少くはない。また、たとえば、各敘述を、いますこし、学説史的展望の上に置いて頂けたら、氏の斬新な着眼や洞察がより一層際立って来たであろうにと、惜しまれる気もするし、全体に資料や本文の引用が、やや度を越していないかとも思う。然し、それは、ここに提起された問題の多様性と斬新さによって、補って余りがあるものである。氏の論をうけついで、発展せしめるのが、後学の義務とすべきであろう。紹介の趣旨に忠実であろうと期したあまりに、文字通り皮相のかいなでに終ったことを御許し願いたい。

(昭和三十九年七月二十日、武蔵野書院刊、七五〇〇円。)

▼受贈雜誌 昭和39年6月〜12月(その二)

国語国文研究(北海道大学)	28
国文学漢文学論叢(東京教育大学)	9
国文学論叢(竜谷大学)	11
国文(お茶の水女子大学)	21
論究日本文学(立命館大学)	23
立命館文学(立命館大学)	231
樟蔭国文学(大阪樟蔭女子大学)	2
成城文芸(成城大学)	37
和洋国文研究(和洋女子大学)	2
別大国文研究(別府大学)	5
薩摩路(鹿児島大学)	10
日本文学(東京女子大学)	23
人文科学科紀要(東京大学教養学部)	32
愛媛大学紀要(人文科学)	9
相模女子大学紀要	18
徳島大学文学芸紀要	18
山口大学文学会誌	15
山口女子短期大学研究報告	18
華(日本女性文学会誌)	4
郷土文化	79

223
 225
 227
 231